区民と創る台東区の男女平等参画のための情報誌

はばたき21通信

2023·3
No.45

“関係ない”ではいられない？
男性とジェンダー平等

自分事にしよう

◉特集

“関係ない”ではいられない？ 男性とジェンダー平等

○寄稿

ジェンダー平等が、日本社会にとって（女性にも男性にも）必要な理由

京都産業大学現代社会学部客員教授・ダイバーシティ推進室長
伊藤 公雄 さん

○数字で考える　男性にとってのジェンダー問題

◆開催！ 2022 みんなのはばたき21フォーラム　～声を上げ続けよう～
◆「はばたき21」講座レポート／トピック
◆たいとうのキラッとさん紹介
◆「はばたき21」情報コーナーおすすめ図書案内

特集　“関係ない”ではいられない？ 男性とジェンダー平等

男女格差や性暴力など、ジェンダー問題は女性の問題と捉えている方もいらっしゃると思いますが、女性問題の多くは男性との関係性の中で生じています。また、男性にも固定的な性別役割分担意識や男らしさへのこだわりがもたらす「生きづらさ」といった問題があり、そうした男性問題の解消にとって、ジェンダー平等は重要だと言われています。

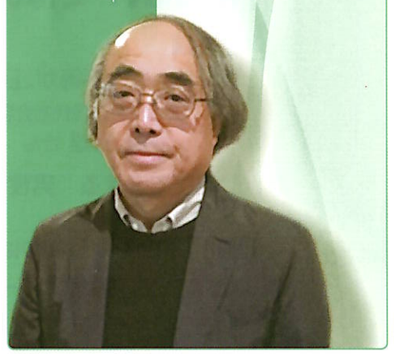
そこで、男性にもジェンダー問題を自分事として考え、行動していただくために、特集前半では、京都産業大学現代社会学部客員教授の伊藤公雄さんに、ジェンダー平等の意義について寄稿していただきました。さらに後半では、男性のジェンダーをめぐる問題等をデータとともに紹介します。

ジェンダー問題の解決には、女性だけでなく、男性の意識や行動の変化が欠かせません。性別にかかわらず、誰もがいきいきと暮らせる社会をめざして、一緒に歩んでいきましょう。

寄稿

ジェンダー平等が、日本社会にとって（女性にも男性にも）必要な理由

―京都産業大学現代社会学部客員教授・ダイバーシティ推進室長―
伊藤公雄さん



誤解された「ジェンダー・フリー」

一昨年の森元東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長の「問題発言」を契機に、日本のメディアが「ジェンダー」という言葉をよく使うようになった。21世紀の初めの「ジェンダー・フリー」問題以後、日本のメディアは、この「ジェンダー」という言葉を「タブー視」していたようにさえ思っていたこともあり、ちょっと驚いた。

「ジェンダー・フリー」問題も、今から考えると、とんでもない誤解の中で議論がされていたように思う。1980年代にアメリカで書かれた「公教育はジェンダー・フリーであるべきか」という論文がある（「ジェンダー・フリー」は和製英語だという人もいたが、そんなことはない）。この論文を書いたバーバラ・ヒューストンという研究者は、この言葉の英語のニュアンスとして、次の3つくらいあると整理している。

①（生理的な性差も無視して）機械的に男女を「同じ」に扱うこと
②ジェンダーに無関心
③ジェンダー・バイアス（ジェンダーに基づく差別や偏見）から自由になること

の3つだ。ヒューストンは、③の立場を支持しているが、①や②のように誤解される可能性があるので、この言葉は使わない方がいい、とこの論文で述べている。

日本での誤解は、ジェンダー・フリーを主張する人たちが③の立場だったのに、反対する人は①の立場から批判した点にあったと思う。「（ジェンダー・フリーの名のもとに）男女が同じ部屋で着替えをさせた」とか「男女同室で身体検査をした」などと言うのは、まさに①の立場からの誤解だ。人権、特に女性の人権を重視する③の立場に立つ人にとって、そんなことをしたら、まぎれもなく「セクシャル・ハラスメント」と非難されたはずだ。このように、日本におけるジェンダー問題は、いろいろな誤解の中で展開してきた。

ヨーロッパにおける労働力不足と女性の社会参加拡大

このジェンダー問題だが、振り返ってみれば、国際社会が本気でこの問題に取り組み始めたのは1970年代のことで、そんなに前のことではない。それまで、世界中がひどい女性差別の下に置かれていたのだ。実際、敗戦後の民主化の中で、「家父長制の廃止」を含む法律上の男女平等を一応実現した日本と比べて、ヨーロッパの諸国では、1970年代から80年代くらいまで法律上の家父長制（「夫による家族の保護と管理、妻の夫への従属」が原則だ）が残っていた国も多い。例えばスイスでは「既婚女性が就業するには夫の許可が必要」と言う法律が、1985年まで残っていた（フランスも、同じ内容の法律が廃止されたのは1965年だ）。

ヨーロッパ社会における女性の社会参加の拡大の背景には、1960年代後半以後の、女性の権利拡大の動きとともに労働力不足の問題があった。ヨーロッパ諸国は、すでに1960年代に労働力不足に入り、当初は移民で補おうとしてきた。しかし、移民が人種差別につながる状況で、70年代には移民の受け入れを中断し、そこに女性の参画が広がった。1970年代、団塊世代の社会参加の中で「人口ボーナス」（人口の編成による経済成長）下にあった日本と比べて、ヨーロッパで女性の労働参画の拡大が生まれたのは、こうした事情もあったはずだ。

女性への固定的なジェンダーの押し付けによる性差別

日本社会も、1990年代、少子・高齢社会の深化を前に、女性の社会参画の拡大が求められたのに、1980年代までの男性の長時間労働、女性の家事・育児と育児後の年収100万円以下の非正規労働という仕組みで「安定成長」してしまった日本社会は、この「成功体験」にとらわれて、変化を怠った。その結果が「失われた30年」とも言われる経済と社会の停滞の原因だったと思う。人口の半分以上いる女性たちの能力発揮を抑制し続けてきたのだから、社会に活気がなくなるのは当然だろう。まさに、男女共同参画（ジェンダー平等）は、「21世紀我が国を決定づける最重要課題」（男女共同参画社会基本法・前文）だったのだ。

固定的なジェンダーに基づく決めつけ（「女は男に従うべきだ」とか「女は家庭にいるべきだ」など）は、女性の社会参画を抑制し、意思決定参画を困難にしてきた。性差別は、こうした女性への固定的なジェンダーの推し付けを原因として生じたものだ。

男性も苦しめる「男らしさ」の呪縛

では、男性はどうだろう。ジェンダーの視点から見れば、男性もまた「男はこうあるべき」という固定的な決めつけで、女性への押し付けとは異なる形で、自由な選択や人間らしい生活を奪われてきた側面もある。

「男は弱音を吐くべきではない」、「感情を露わにしてはならない」、「問題は他人に相談せず自分だけで解決せよ」といった「男はこうあるべき」という思い込み（男性性というジェンダー）は、女性に対する差別や排除の原因であるとともに、男性たちを苦しめてきたところもあるはずだ。なぜ、過労死は男性に多いのか、なぜ男性の中には「自殺したい」とまで思い込む人がたくさんいるのか（実際、男女の自殺死亡率は、世界中で圧倒的に男性の方が高い割合を占めている）。男性も「男らしさ」というジェンダーに呪縛されてきたのだ。

21世紀の日本を元気にするジェンダー平等社会

「男だから」と長時間労働を強いられ、家庭放棄をしてきた男性たちも、家庭と仕事の両立へと向かう必要がある。家庭外の仕事の多くを「男」が背負う社会から男女で社会を支える社会へ、逆に、「家のことは女性に」といって家事や育児を避けてきた男性たちが家庭生活を取り戻す社会へと日本社会を変えていくことが、21世紀の日本を元気にしてくれる道であるはずだ。ジェンダー平等社会の形成は、21世紀日本社会の最重要課題だと言うのは、このことを意味しているのだと改めて思っている。

◆◆◆ 伊藤公雄さんプロフィール ◆◆◆

京都大学文学部・同大学院博士課程で社会学専攻。
大阪大学人間科学部助教授・教授を経て、京都大学院文学研究科・文学部教授。現在、京都産業大学現代社会学部客員教授・ダイバーシティ推進室長、京都大学・大阪大学名誉教授。
専門は文化社会学、政治社会学、ジェンダー論。
▶主な社会活動：内閣府男女共同参画会議専門調査会委員（2001～11）、日本ジェンダー学会会長などを歴任。現在、国立女性教育会館監事、日本社会学会会長、ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン共同代表など。
▶主な著書：『〈男らしさ〉のゆくえ』『「男女共同参画」が問いかけるもの』『女性学・男性学　第3版』など。

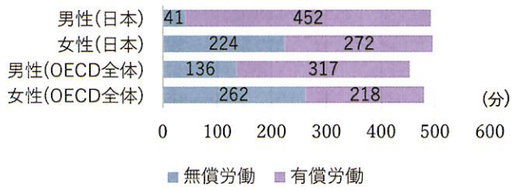
数字で考える 男性にとってのジェンダー問題

「夫は外、妻は家庭」という性別役割分担意識に反対する人の割合は、男女ともに賛成する人を上回っていますが…

生活時間の国際比較

男女別に見た生活時間

（週全体平均、1日あたり）



※無償労働…家事、育児、介護、買い物、ボランティア活動など
※有償労働…仕事、通勤・通学、授業・学校での活動など

OECD（経済協力開発機構）が2020年にまとめた生活時間の国際比較データ（15～64歳の男女を対象）における日本の状況

男性の有償労働時間　452分
無償労働時間　41分

＊有償労働時間の男女比⇒男性は女性の1.7倍
＊無償労働時間の男女比⇒女性は男性の5.5倍

＊諸外国と比較して
○男性も女性も有償労働時間が長いが、男性は極端に長い。
○無償労働が女性に偏るという傾向が極端に強い。
○男女とも有償・無償をあわせた総労働時間が長く、時間的にはすでに限界まで労働している。

［内閣府『令和2年版　男女共同参画白書』］

家庭生活への男性の参画

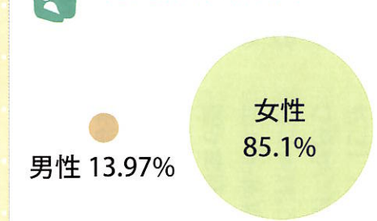
家事関連時間

※家事、介護・看護、育児、買い物の時間を含む、1週間での1日あたりの平均時間
［総務省統計局「令和3年社会生活基本調査」］

＊男性の家事関連時間は増加傾向。男女差も縮小しているが、依然として差は大きい。

＊6歳未満の子供を持つ夫・妻の家事関連時間⇒夫は1時間54分（家事：30分、育児：1時間5分）、妻は7時間28分（家事：2時間58分、育児：3時間54分）

育児休業取得率

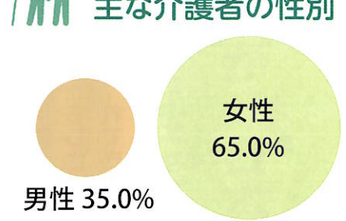


［厚生労働省「令和3年度雇用均等基本調査」］

＊男性の取得率は過去最高を更新したが、政府目標は「2025年までに30%」

＊内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（令和元年11月公表）⇒20～30代の男性の7割以上が、育児を「配偶者と半分ずつ分担したい」と希望

同居する主な介護者の性別



［厚生労働省「国民生活基礎調査（令和元年）」］

＊介護の担い手として義理の娘の割合が低下する一方、夫・息子（特に息子）の介護者が増加

＊総務省「就業構造基本調査」⇒平成28年10月～平成29年9月までの1年間で、家族の介護や看護を理由とした離職者は約9.9万人。その内の75.8%が女性

男性の育児参画を阻む壁

家事・育児に関する役割分担については、若い世代の男性ほど妻と半分ずつ分担したいと希望していますが、現実にはできていません。

こうした現状の背景として、男性に多くみられる長時間労働の問題、職場や周囲の理解不足などに加え、男性が育児に参画しにくい慣行や環境等があると考えられています。

○男性が家事・育児のために帰宅することに、理解のない同僚がいる。
○幼稚園・保育園などが、母親だけに連絡事項や子供の様子を伝える。
○PTAや学校行事に参加するのは母親ばかりで、父親が行きづらい。
○公共交通機関や商業施設等の男性用トイレにおむつ交換台やベビーチェアが設置されていない。　など

［内閣府「仕事と子育て等の両立を阻害する慣行等調査」］

▲今年度開催した『プレパパ・パパの子育て講座』の一場面。「仕事と子育ての両立は永遠の課題」といった声も…。

性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）

性別役割に対する意識　「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」の合計

男性　上位10項目		%	女性	順位	%
1	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	48.7	1		44.9
2	女性には女性らしい感性があるものだ	45.7	2		43.1
3	女性は感情的になりやすい	35.3	3		37.0
4	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	34.0	8		21.5
5	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	33.8	4		33.2
6	女性はか弱い存在なので、守られなければならない	33.1	6		23.4
7	男性は結婚して家庭をもって一人前だ	30.4	※		17.9
8	男性は人前で泣くべきではない	28.9			17.6
9	女性は結婚によって、経済的に安定を得る方が良い	28.6	5		27.2
10	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ	28.4	7		21.6

※女性の上位10項目外

性別役割についての意識・経験

意識：男性 23.6%　　女性 17.7%
経験：男性 20.7%　　女性 26.5%

※意識：測定41項目について、各項目「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」の回答率の41項目平均（%）を男女別に算出したもの
※経験：性別に基づく役割を「直接言われた」あるいは「言動や態度から感じた」経験の回答率の41項目平均（%）を男女別に算出したもの

内閣府男女共同参画局が行った「性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）」に関する調査結果

＊男女ともに上位に入った8項目のうち、7項目で男性の割合の方が高い。

＊男女差が大きく開いたのは次の3項目
○デートや食事のお金は男性が負担すべきだ
○男性は結婚して家庭をもって一人前だ
○男性は人前で泣くべきではない

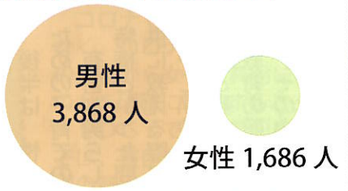
＊全項目平均では
○性別役割の「意識」⇒男性が強い。
○直接言われた・言動や態度から感じた「経験」⇒女性の方が多い。

※無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）…誰もが潜在的に持っている思い込みのこと。

［内閣府男女共同参画局『令和4年度　性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究調査結果』］

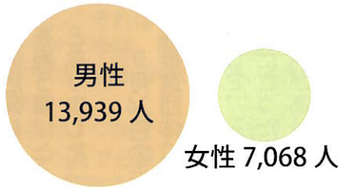
男性の孤独死・自殺

東京都23区における孤独死数（令和元年）



［東京都「東京都監察医務院で取り扱った自宅住居で亡くなった単身世帯の者の統計」］

令和3年の自殺者数



［厚生労働省「令和3年中における自殺の状況」］

＊令和元年の東京都23区における孤独死数⇒男性が全体の約7割

＊令和3年の自殺者数⇒男性は女性の約2.0倍。要因に「孤独感」がある自殺者は、男性の方が多い。

＊内閣府「平成30年度高齢者の住宅と生活環境に関する調査」⇒近所の人とのつきあいの程度をみると、いずれの世帯形態でも、男性の方が女性に比べて「親しくつきあっている」「あいさつ以外にも多少のつきあいがある」と回答する割合が低い。

Toxic　Masculinity
「有害な男性性／有害な男らしさ」

「有害な男性性」「有害な男らしさ」などと訳されるこの用語は、男らしさそのものが有害ということではなく、「自他に悪影響を及ぼすような男性性のあり方や男性性へのこだわり」「自他を害する過剰な男らしさへの執着」などを意味するとされ、1.感情の抑圧／苦悩の隠蔽　2.表面的なたくましさの維持　3.力の指標としての暴力の3つがあげられています。
他者に有害なだけでなく、こうした呪縛により自らストレスを抱え込んでしまうこともあり、男性による暴力・ハラスメントや自殺率の高さの原因として言及されることがあります。

今年度実施した講座『ダイバーシティ時代の「男性問題」～ジェンダー平等のために「男性」は何ができるのか～』（講師：川口遼さん）でも取り上げられました。

女性への暴力をなくすための男性の取組
ホワイトリボンキャンペーン

ホワイトリボンキャンペーンは、性暴力、DV、セクハラなど様々な女性への暴力に対して、暴力を振るわない男性たちが"自分には関係ない"とはせず、主体となって撲滅をめざす活動です。現在、50か国以上に広がっており、「フェアメン」を増やすアクションを展開しています。

○「フェアメン」とは
身近な人々に対して、常にフェア（対等）な態度で接し、暴力を決して「振るわない」「許さない」ことを誓い、社会にある暴力に「沈黙しない」、ポジティブな生き方を次世代に示し、行動する男性のこと
○フェアメン3カ条
1.耳を傾ける　2.暴力に訴えない
3.相手も自分も大切にする

※ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン　https://wrcj.jp/ より

開催！

2022 みんなのはばたき21フォーラム
～声を上げ続けよう～

●2022年9月25日(日)
フォーラム講演会

●2022年9月24日(土)・25日(日)
男女平等推進団体による
ワークショップ&作品展示

男女平等参画社会の実現に向けたイベントである「みんなのはばたき21フォーラム」。今年度は、3年ぶりに来場者を迎えて開催することができました。

9月25日(日)には、「日常にある『らしさ』にとらわれない多様性時代の子育て」と題した講演会を実施。ジェンダー平等についての意識が高まっている昨今、二児の母であり、弁護士として離婚・性暴力など様々な問題に関わってきた太田啓子さんによる本講演は、時宜を得たものだったと思います。

まず、「これからの男の子たちへ」のメッセージとして、①「男らしさ」の呪いから自由に生きてほしい、②性差別構造の中では「男性」というマジョリティとしての特権をもっていることを自覚し、マジョリティとして性差別・性暴力に積極的に抗ってほしいという2点を挙げ、講演が始まりました。

◀フォーラム企画委員の方たち

太田さんが離婚事案で感じる性差別構造で特に深刻だと感じるのが男女間の経済力格差だといい、その現状について、日本のジェンダー・ギャップ指数や男女間の賃金格差、管理職の女性割合の低さなど様々なデータが示されました。

家事やケアといった無償労働の女性への偏り、そして、近年のコロナ禍で男性の居宅時間が増えたにもかかわらず、育児において女性の負担が大きい点に変化はないとのこと。こうした日本の性差別解消への歩みの遅さは、「男は仕事・女は家庭」という固定的な性別役割分担意識がなかなか払拭できないことを示しているようです。また、男性優位の状況が、女性に対する性暴力につながる一因にもなっていることへの言及もありました。

▲太田啓子さん

後半は、性差別や性暴力をなくすための子育ての話へ。

有害な男らしさやマジョリティの特権といった問題について考え、子供に教える際に参考となるような書籍やCM映像、実際の事件やジェンダーと暴力に関する報告書の紹介、性教育の重要さなどが語られましたが、その中でホワイトリボンキャンペーンでの「フェアメン」の定義(5ページ参照)が印象的でした。

会場からの質問・指摘と太田さんとの活発なやりとりもあり、子育てを担う親にとって、示唆に富む講演となりました。

9月24日(土)・25日(日)の男女平等推進団体によるワークショップと作品展示では、活動成果の発表の場として、入念な準備を重ねて臨んでくださった団体と区民の皆さんとの交流があり、楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。

参加者の声

様々な団体が活発に活動していて素晴らしいと思いました。

いろいろ考えさせられるものがあった。

学びながら楽しめる良い機会となりました。

バラエティに富んだワークショップや企画で、親子ともいろいろなことにふれられて良かったと思います。

多くの人とふれあえる楽しさがとても良かった。

次回も楽しみにしています。

「はばたき21」講座レポート

「はばたき21」では、男女平等参画社会の実現をめざして様々なテーマを扱った講座を実施しています。ここでは、今年度実施した２講座を紹介します。

『もっと知ろう政治のこと ～女性が参加するとこう変わる～』

■日時：2022年7月30日(土)10：00～12：00
■講師：申きよんさん
（お茶の水女子大学教授／パリテ・アカデミー共同代表）

男女格差をはかるジェンダー・ギャップ指数で、日本の順位は146か国中116位（2022年）。最も問題とされるのが政治分野で、女性議員の数が極端に少ないのです。

こうした状況に対して申さんは、これまでの政治は男性を基準としてきたため、ジェンダー不平等や政策に偏りが生じていると指摘。女性や若者、マイノリティー属性を持つ人々はそれぞれ異なるニーズを持っているので、そうした多様な人材が政治に参画することで議論の質が向上するといい、実際に女性議員が増えたことによって起きた様々な変化や、どうすれば現状が変えられるのかといったお話が続きました。

まずは主権者にできることとして、政治について普段から会話をするなど、政治に関心をもつことが大切とのこと。自分が政治家になることを検討しましょうという呼びかけもあり、なぜ女性の政治参画が重要なのかをわかりやすく教えてくださいました。

アンケートより

＊女性の政治参画の状況から変化、取組まで詳しく説明され、新しい知識を獲得できました。
＊男性という立場からもできることを考えたいと、改めて思わされました。

『ジェンダーの視点から女性の貧困を考える』

■日時：2022年12月3日(土)14：00～16：00
■講師：藤原 千沙さん（法政大学大原社会問題研究所教授）

コロナで顕在化した女性の貧困。しかし、それは今に始まったことではなく、コロナ禍以前から存在した問題です。今回、日本社会における貧困の変遷から女性と貧困に関する藤原さんのお話を伺い、何が、なぜ問題なのかを明確に理解することができました。

ＳＤＧｓでも「貧困をなくそう」と目標１に掲げられていますが、日本では、貧困解消のための政策を検討するうえで必要とされる男女別・年齢別の貧困率の公式統計がないという事実に驚かされました。

また、貧困の把握も世帯単位で行われているため、世帯内における女性の貧困が見えにくくなっていること、性別分業世帯を優遇・誘導する社会保障制度、男女の老齢年金支給額の差、子供のいる女性の稼得力の低さなどの解説によって、女性の貧困の背景にある様々な社会構造上の問題点等を知り、ジェンダーの視点から貧困を考えることの重要性と、それらが政策などに反映されることの必要性を改めて感じました。

アンケートより

＊女性の貧困に対してはジェンダー・バイアスが大きく作用していることがよくわかりました。
＊非常に有意義な講義で、もっと多くの人にお話をきいてほしいと思いました。

トピック

＊＊＊＊＊「区民学習活動支援事業」３講座を実施しました ＊＊＊＊＊

「区民学習活動支援事業」は、男女平等参画をテーマにした区民向け講座やワークショップの企画を男女平等推進団体に応募していただき、選考会での審査を経て、「はばたき21」と共催で実施する事業です。
今年度は、２団体による３講座が実施されました。

主催団体：台東女性史あゆみの会
『聞き書きから見えた女性たちの願いと希望 ～千代田区女性史編さんを通して～』
日時：2022年12月4日（日）14：00～16：30

主催団体：下町グリーフサポート響和国
『日常のグリーフに寄り添う講座』

①「女性のライフステージとグリーフ ～経験者のお話と、日常にあるグリーフへの理解～」
日時：2022年11月20日（日）14:00～16:00

②「音楽とグリーフ ～音楽による安らぎと癒しを味わう～」
日時：2023年2月12日（日）14:00～16:00

たいとうのキラッとさん紹介

対話し、違いを知り、それも尊重していくことが大事

山藤 弘子 さん　日本語教師

台東区主催の「外国人のための日本語教室」の講師として日本語を教えるだけでなく、区内の外国人が自立した生活を送れるよう、様々な支援活動にも奔走する山藤さんにとって、日本語教師はまさに生きがいであり、ライフワーク。学校や地域での外国人親子との交流の中で、全く日本語が話せなかった子供たちが進学・就職と成長していく姿を見たり、地域住民として自分も誰かの役に立ちたいと言ってくれる保護者が増えてきたことがとても嬉しいと、にこやかに話してくださいました。

大学時代の中国留学に加え、社会福祉士をめざして勉強していたことも、現在の活動の原動力の一つ。そんな山藤さんが日本語教師として心がけているのは、このまちに暮らす外国人と日本人のどちらの不安にも寄り添い、両者の立場で物事を考えるようにするということ。また、日本語教室での一場面。遠足の持ち物にあった「弁当」「敷物」がわからず、困り果てて学校からのお便りを持参した外国人ママがおり、日本人なら誰でもわかる単語でも言語、文化の違う相手には通じないというお話が印象に残りました。

「自分でできる簡単な日本語でいいので、まずは近くにいる外国人に話しかけてみてほしい。対話し、違いを知り、それも尊重していくことが大事」という山藤さん。共生していくためにはどんな方法が正解かわからない。しかし、一人でも多くの多種多様な人と関わり合っていくこと、それが障害者や高齢者とのつながりにも活かされていくのではないかと感じているそうです。

多様性を認め合う社会には、異なる習慣・文化を持つ外国人も含めた様々な視点が重要であることを教えていただいたように思いました。

「はばたき21」情報コーナーおすすめ図書案内

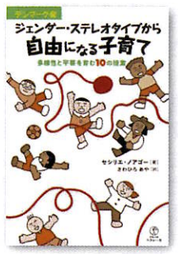
『考えたことなかった』

魚住直子作　西村ツチカ絵　偕成社

ある日、未来のお前だというネコから「このままだと将来、たいへんなことになる」と声をかけられた中学生の颯太が、家庭や学校など日常生活の中にあるジェンダー・バイアスや社会の不公平さに気づき、考え始める物語。

『デンマーク発　ジェンダー・ステレオタイプから自由になる子育て　多様性と平等を育む10の提案』

セシリエ・ノアゴー著　さわひろあや訳　ヘウレーカ



子供がお互いの違いを認め合い、自分らしく生きられるようにするには、大人が性別にまつわる固定観念や先入観に気づくことが大切。ジェンダー・ステレオタイプを次世代に引き継いでしまわないための子供との向き合い方を提案する。

『家事は大変って気づきましたか?』

阿古真理著　亜紀書房

大変さが見えづらく、軽んじられてきた家事やケア。明治から令和までの社会や歴史を視野に入れ、家事に対する人々の意識の変遷を読み解き、負担を軽くし家族でシェアする道を探る。

編集後記

＊男性の暮らしや働き方、そして生活する社会の中に、様々なジェンダー問題は存在します。他人事から自分事へ。“男性だってジェンダー平等”と思っていただけるように、「はばたき21」」ではこれからも様々な事業を展開していきます。（I）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊フォーラム講演会でのメッセージ「これからの男の子たちへ」は、遠い昔50年前の男の子にも届きました。現在60代の男性としては、今号の記事をよく受け止めたいものです。

情報誌編集委員　梶原　雄

＊はじめて記事を書くことができほっとしています。本号では、男性のジェンダーに関する特集をはじめ、盛り沢山の内容で、読み応えのあるものになりました。

情報誌編集委員　木村 泰子

編集・発行：台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」
場　　所：台東区西浅草 3-25-16
（台東区生涯学習センター４階）
電　　話：03-5246-5816
※日曜・休館日以外の午前９時～午後５時
開館時間：午前９時～午後９時
※新型コロナウイルス感染症の感染状況により、開館時間は変更になる場合があります。
休 館 日：第１・第３・第５月曜日
（祝日にあたる場合はその翌平日）
年末年始（12月29日～１月３日）

はばたき21　検索

再生紙を使用しています。